

100万回生きたねこ

佐野洋子 作・絵



☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:☆'...:☆'...:

100万年も 知らない ねこが いました。

100万回も しんで 100万回も 生きたのです。

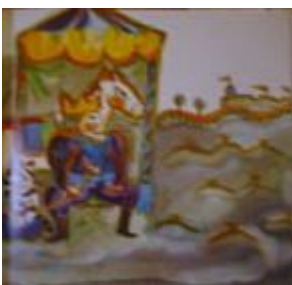
りっぱな とらねこでした。

100万人の人が そのねこをかわいがり

100万人の人が そのねこがしんだときなきました。

ねこは 1回もなきませんでした。

☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆☆'...:☆'...:☆'...:☆☆



あるとき ねこは 王さまの ねこでした。

ねこは 王さまなんか きらいでした。

王さまは せんそうが じょうずで いつも せんそうを していました。

そして ねこをりっぱなかごにいれて せんそうにつれていきました。

ある日 ねこは とんできた やに あたって しんでしまいました。

王さまは たたかいの まっさいちゆうに ねこを だいて なきました。

王さまは せんそうを やめて おしろに 帰ってきました。

そして おしろの にわに ねこを うめました。

☆'...:☆'...:☆'...:★☆'...:★'...:☆'...:★☆'...:★'...:



あるとき ねこは 船のりの ねこでした。

ねこは 海なんか きらいでした。

船のりは せかいじゅうの海と せかいじゅうのみなとに ねこをつれていきました。

ある日 ねこは船からおちてしまいました。ねこはおよげなかったのです。

船のりが いそいであみですくいあげると

ねこは びしょぬれになって しんでいました。

船のりは ぬれた ぞうきんのように なった ねこを だいて

大きな声で なきました。そして遠い みなと町のこうえんの木の下にねこ
をうめました。

☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆☆'...:☆'...:



あるとき ねこは サーカスの手品つかいのねこでした。

ねこは サーカスなんか きらいでした。

手品つかいは 毎日ねこを はこの中に入れて

のこぎりで まっふたつに しました。

それから まるのままのねこを はこからとりだし はくしゅかつさいをう
けました。

ある日 手品つかいは まちがえて ほんとうに ねこをまっふたつに し
てしまいました。

手品つかいは まっふたつに なってしまったねこを 両手にぶらさげて大
きな声で なきました。

だれも はくしゅかつさいを しませんでした。

手品つかいは サーカス小屋のうらに ねこをうめました。

☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:



あるとき ねこは どろぼうの ねこでした。

ねこは どろぼうなんか だいきらいでした。

どろぼうは ねこと いっしょに くらい町を ねこのように しずかに歩
きまわりました。

どろぼうは いぬのいる 家にだけ どろぼうに はいりました。

いぬが ねこに ほえているあいだに どろぼうは 金庫をこじあけました。

ある日 ねこは いぬにかみころされてしまいました。

どろぼうは ぬすんだ ダイヤモンドと いっしょに ねこをだいて

夜の町を 大きな声で なきながら 歩きました。

そして いえにかえって 小さなわに ねこをうめました。

☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆



あるとき ねこは ひとりぼっちの おばあさんの ねこでした。

ねこは おばあさんなんか だいきらいでした。

おばあさんは 毎日 ねこをだいて 小さなまどから 外を 見ていました。

ねこは 一日じゅう おばあさんの ひざの上で ねむっていました。

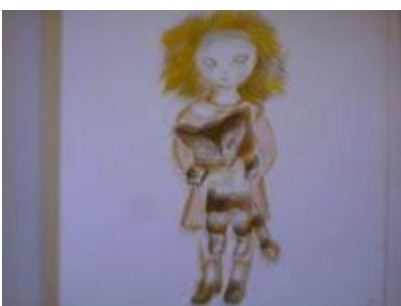
やがて ねこは 年をとって しにました。

よぼよぼの おばあさんは よぼよぼの しんだねこを だいて

一日じゅう なきました。

おばあさんは にわの木の下に ねこをうめました。

☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:



あるとき ねこは 小さな 女の子の ねこでした。

ねこは 子どもなんか だいきらいでした。

女の子は ねこを おんぶしたり しっかり だいて ねたりしました。

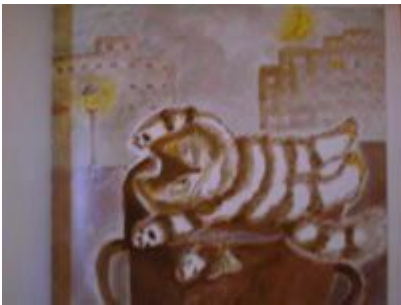
ないたときは ねこの せなかで なみだを ふきました。

ある日 ねこは 女の子の せなかで おぶいひもが 首に まきついて
しんでしまいました。

ぐらぐらの頭に なってしまった ねこを だいて 女の子は 一日じゅう
なきました。 そして ねこを にわの 木の下に うめました。

ねこは しぬの なんか へいきだったのです。

☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:



あるとき ねこは だれの ねこでも ありませんでした。

のらねこだったのです。

ねこは はじめて 自分のねこに なりました。

ねこは 自分がだいすきでした。

なにしろ りっぱなとらねこだったので りっぱなのらねこになりました。

☆'...:☆'...:☆'...:★☆☆'...:★'...:☆'...:★☆☆'...:★'...:



どんな めすねこも ねこのおよめさんに なりたがりました。

大きなさかなを プレゼントする ねこも いました。

上等のねずみを さしだす ねこも いました。

めずらしい またたびを おみやげにする ねこも いました。

りっぱな とらもようを なめてくれる ねこも いました。

ねこは いいました。

「おれは 100万回も しんだんだぜ。いまさら おっかしくて！」

ねこは だれよりも 自分が すきだったのです。

☆'...:☆'...:☆'...:★☆☆'...:★'...:☆'...:★☆☆'...:★'...:



たった 1ぴき ねこに 見むきも しない白いうつくしいねこがいました。

ねこは 白いねこの そばに 行って

「おれは 100万回も しんだんだぜ！」 と いいました。

白いねこは「そう。」と いったきりでした。

ねこは すこしはらをたてました。なにしろ 自分がだいすきでしたからね。

つぎの日も つぎの日も ねこは白いねこの ところへ行って いいました。

「きみは まだ 1回も 生きおわって いないんだろ。」

白いねこは「そう。」と いったきりでした。

☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:



ある日ねこは白いねこの前でくるくると3回ちゅうがえりをしていいました。

「おれ サーカスの ねこだったことも あるんだぜ。」

白いねこは「そう。」と いったきりでした。

「おれは100万回も.....。」と いいかけて ねこは

「そばに いても いいかい。」と 白いねこに たずねました。

白いねこは「ええ。」と いいました。

ねこは 白いねこの そばに いつまでも いました。

☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...



白いねこは かわいい子ねこを たくさんうみました。

ねこは もう「100万回も.....。」とは けっしていいませんでした。

ねこは 白いねことたくさんの子ねこを自分よりも すきなくらいでした。

☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:



やがて 子ねこたちは 大きくなって それぞれ どこかへ いました。

「あいつらも りっぱな のらねこに なったなあ。」

と ねこは まんぞくして いいました。

「ええ。」と 白いねこは いいました。

そして グルグルと やさしく のどを ならしました。

白いねこは すこし おばあさんに なっていました。

ねこは いっそう やさしく グルグルと のどを ならしました。

ねこは 白いねこといっしょに いつまでも生きていたいと思いました。

☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:☆'...:☆'...:☆☆'...:



ある日 白いねこは ねこのとなりで しずかにうごかなくなっていました。

ねこは はじめてなきました。 夜になって 朝になって また夜になって

朝になって ねこは100万回もなきました。

朝になって 夜になって ある日のお昼に ねこはなきやみました。

ねこは 白いねこの となりで しずかに うごかなくなりました。



ねこは もう けっして 生きかえりませんでした。

あらすじ

主人公の猫は、ある時は一国の王の猫となり、ある時は船乗りの猫となり、その他、サーカスの手品つかいの猫、どろぼうの猫、ひとりぼっちのお婆さんの猫、小さな女の子の猫…と 100 万回生まれかわっては、様々な飼い主のもとで死んでゆく。その時、100 万人の飼い主は猫の死にひどく悲しんでいたが、当の猫はまったく悲しまなかった。主人公の猫は、飼い主のことが大嫌いだったのだ。

ある時、主人公の猫は誰の猫でもない野良猫となっていた。「自分だけの事が好き」な主人公の猫は、100 万回生きたことを自慢し、周囲のメス猫たちも何とか友達や恋人になろうと、プレゼントを持ってきたりして周囲に寄ってくる。

しかし、唯一 自分に関心を示さなかった一匹の白猫の興味をなんとか引こうとするうちに、いつのまにか主人公の猫は、白猫と一緒にいたいと思うようになる。そして、白猫にプロポーズをするのであった。白猫は主人公の猫の思いを受け入れた。

そして時がたつと、白猫はたくさん子供を産み、年老いてゆき、やがて猫の隣で動かなくなった。そこで猫は初めて悲しんだ。朝になっても昼になっても夜になっても、100 万回泣き続けた。

そして猫も、とうとう白猫の隣で動かなくなり、それ以後生き返ることはなかった。

評価

- 歌人の柘野浩一は、「100 万回生きて 100 万回死んだ主人公のオスネコは、最後の最後には二度と生き返らなくなる。彼は生まれて初めて本当の意味で死んでしまうわけなんだけど、たいていの読者は物語の終わりを知ったとき『あー、よかった。めでたし、めでたし』という気分になっているはずで、そこがすごいのだ。主人公が死んでしまうのに『あー、よかった』と心から思える不思議。その『不思議』の部分は、ぜひ絵本の実物を読んで味わってください」とこの作品を高く評価している。